

しらおか歴史物知りシート

No.4-1

こもれびの森・歴史資料展示室

【新設白岡車站之記】 明治43年(1910)造 高364cm

旧国鉄東北線白岡駅は、明治43年2月11日に開業しました。本碑は、その開業を記念して同年5月、白岡駅前に建てられました。

撰文と書は中島撫山。篆額は亀田雲鵬。裏面には、本碑建設のための寄付者氏名が列記されています。

【訳文】

新設白岡停車場の記

東京 雲鵬 亀田英 篆額

白岡の里は「白岡八幡宮」の名で遠くまで知れ渡っている。八幡宮の春・秋の例祭には祈願者が群れをなして、お参りに訪れる。ただ、周りの都市より人家もまばらで舟運も道路も便がよくなかった。幼子や老人は遠くに行くことが出来なかった。八幡様から外に僅かな距離を隔てて東北線の線路が通っているのに停車場がないのを、みんな残念に思っていた。また、この地は寒く片田舎にして民はみな純朴で農業に勤いそしんでいる。近隣には十数の村々があり、雑穀・果物や青菜、瓜が野に広がり、柿や栗は木にたわわに実り、甘藷も沢山地面に掘り起こされ、まるで丘のようだ。これに加えて畑には桑園があり、茶が植えられている。年々生産する米は三万二千石、麦は四万九千石、細茶は約二万斤。生繭も数千籠。その他雑類、たきぎなどもまた少なくなかった。そして、女性たちの仕事の織物も、年に百二十万反は下らなかつた。こういった生産物(商品作物)の利益で生活をするものは四千余家あり、だいたいが弁当持ちで馬車を引きながら、道みちをめぐり移動販売をしていた。帰る頃には荷を運ぶ牛馬と人間の足は疲れ切っていた。そうでなければ、あるいは貧民は自分で荷を背負って市場まで行き、小売をしなければならぬ。かさばり重いものは遠くまで持つて行くことは出来なかつたのだ。そんなことから、住民もまたみんな停車場が出来て欲しい、すぐに何度か鉄道会社に停車場設置を請願していた。しかし、鉄道会社側は停車場設置の利が少ないと考えて、すぐ対応することを承知しなかつた。しかし、会社が国有化したことで日勝村・篠津村両村長は、また停車場設置を提唱した。近隣村々で、停車場設置を希望する人々もこの意見に賛同して国に請願した。財産家や有力者は用地を買取り停車場用の土地を国に献上した。国はこれを受入れ、日勝村・篠津村両村境である字小久喜の地九千歩の場所に停車場を創設することを決めた。その土地のうち三分の二は村々の有志者によって献納された土地なので、国は費用少なくて済み、そして村民たちの願いは叶えられた。

今年明治四十三年二月十一日、工事が終わり停車場を開業するのに、この駅は「白岡駅」と名付けられた。白岡八幡宮から四五百メートル程しか離れていないので、参拝者を煩わせることもない。さらに、旅行者、方々から荷を運び商売する者もまた労が少なくなる。停車場が出来た数ヶ月前、先に請願をした人々が来て、自分にこういったことを記してほしいと言ってきた。自分はこうやって記して思うのだが、「国を豊かにし、民の暮らしを便利にする」という、国にとつて良いことは則ち民にとつてもよいことなのだ。しかし物事というのは、予期できないことが多い。利益を産むところに人は集まる。駅を置く、停車場を開く場所には利益を求めてわれ勝ちに争う者が四方八方から群がり来て、その中には必ず良民と悪者が同じくらいに存在する。欲望に誘われ易く、悪い事に染まってしまう青年や物の道理がまだよくわからない少年たちは心が定まらない。人は心掛け次第で善人にも悪人にもなると定められていることは古の賢人が憐れむところである。自分は今絶対にそうであるかどうかを言えるであろうか。そもそも思ひもかけない将来のことに備えることは昔からよい政治だと言われていた。事に先んじて注意することは父親の責任である。ああ、自分は老いてその父親の責にあるというのに、現世での役割を知ること出来ない。しかし、世の道徳を以て庶民の心をつなぐことは常日頃の理想である。たとえ苦言でも、耳に入ればそれは国を豊かにし、民の暮らしを便利にして利益を生むものだ。そうやって純朴質素という美德が壊れずに、だらしなく狡猾く贅沢で派手な悪風に、そそのかされなければ、農業に勤しむを本務とするこれまでの習慣は廃れないだろう。白岡駅に大きく期待しているところである。

明治四十三年夏五月

中島撫山作・書 黒須平吉刻

